

● シリーズ 私の見た日本 Vol.173

日本の都市空間の本質

Pablo Ruiz Dorronsoro (ルイズドロンソロ・パプロ)

スペイン出身。2017年ベルリン工業大学建築学専攻卒業。
2017～2018年マドリッドでPez Arquitectos SLP勤務。
現在、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻。千葉学
研究室在学



日本の唯一無二の街並みは世界中から注目を浴びている。住宅街が高層ビル街に近接する風景は日本でよく見られるが、外国人はこれを不思議に思う。なぜなら、西洋の都市の構成と大きく違うからである。ヨーロッパの街では、住宅街と高層ビル街が強い境界で分離されており、その間に空間関係は全くない。性格の異なる機能が共存する日本の街を自分自身も興味深いと思った。独特な街並みが成立しているだけでなく、このなかに人々がどのように集まるのかも話題になっている。日本の都市計画には大規模な公共空間が多数含まれているが、そのような人間スケールを超える規模のスペースよりも、昔ながらの風景である横丁や路地といった小規模な公共空間が愛されている。この点においても代表的な広場を公共生活の中心にする西洋の都市とは違う。出身地のスペインと比較しながら日本で体験した街を解釈してみたい。

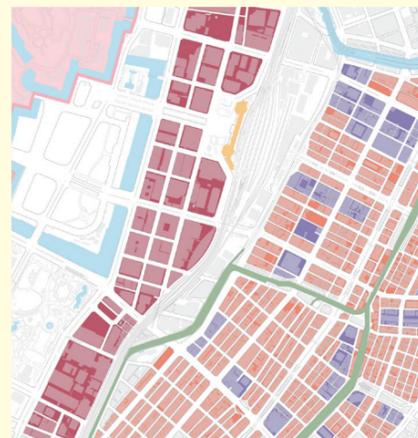
この街を理解するには、都市空間の流動性を解説する必要がある。日本では、既存の都市構造に整備されることが多い。災害後に行われる再建事業がその一つだ。例えば、1923年に発生した関東大震災後に明治通りや昭和通りなどを含めた新しい道路網が市街の中に設置された^{*1}。災害だけではなく、開発計画も街のあり方を変える。可住地が少ない日本では都市の拡大は難しいため、土地利用の転換と街区の拡張または縮小がよく行われる。したがって、日本の都市空間は、変え

てはいけない固定なものではなく、時代の変遷とともに変わっていく。これに対して、ヨーロッパの都市開発では既存の構造を変えずに新しい部分がつぎはぎのように追加される。スペインでは19世紀につくられた木造の建物が旧市街に多数残っているのに対して、日本の建物の平均寿命は木造の場合27～30年、鉄筋コンクリート造の場合40年である^{*2}。日本ではリフォームより建替えが優先される場合が多いが、このシステムは人口減少社会においては非効率的であり、都市をどのように開発するべきかが今後の課題になっている。

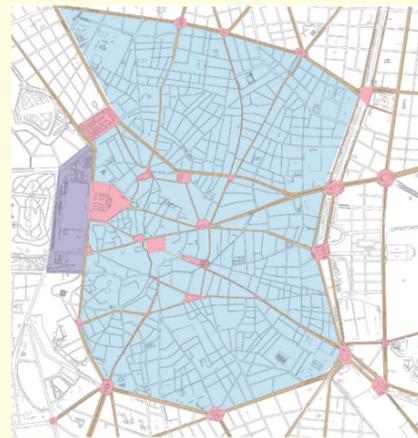
都市空間の流動の結果として、日本の街にはさまざまな時代の都市計画が1つの領域に混合している。東京駅の界隈はこの現象の証である。駅の東側にある八重洲と銀座の細長いブロックには新築の建物が数多くあるが、街の構成は昔のままである。江戸初期に銀座と八重洲の開発が始まり、江戸町割りという様式が用いられた。京間60間(約120m)四方の正方形が街区単位で、真ん中には、京間20間(約40m)四方の空地が広がる。長屋は街区に設置された京間5間(約10m)×京間20間(約40m)の街屋敷の中にあつた。横丁は街区の表通りと裏通りをつなげ、長屋の間のスペースは路地であった。しかし、明暦大火で銀座の街がほとんど焼失し、再整備が行われたことで町割りが変わった。真ん中の空地がなくなり、その代わりに街屋敷の3列が並ぶようになった^{*3}。これは、今日の銀

座だけではなく、八重洲でも見られる構成だ。さらに、江戸時代からの町割りにいくつかの整備がなされ、首都高はその一つである。1964年の東京オリンピックに向けて建設された道路は昔の構成であった街を2つに分け、新しい構造が古い構造を貫通し、2つのスペースの間には面白い関係性が生まれた。

西側は大きく違う。1914年に竣工された駅舎は明治後期の銀座煉瓦街を背景につくられた。しかし、煉瓦街が関東大震災でほぼ消滅し、駅舎はその時代の思い出として残って



東京界隈の構成
 ■ 江戸時代の構造がある街区
 ■ 江戸時代の構造が開発された街区
 ■ 首都高 ■ 東京駅舎 ■ 開発された街区 ■ 江戸城の境界



マドリッド中心部の広場と大通り
 ■ 広場 ■ 表通り ■ 旧市街・中心部 ■ 王宮

いる^{*4}。東京駅と皇居の間の丸の内エリアは、関東大震災後に急速に発展したビジネス街で、2000年代にも大規模な開発が行われたことによって現代の都市開発の代表とされる。東京の起源である江戸城に近い街は最も新しい構造となり、都市空間の性格を映す。これに比べて、スペインのマドリッドの構造は東京とは正反対であると言えるかもしれない。街は中心であるプエルタ・デル・ソル広場から放射的に開発され、東京のようにさまざまな構造が混ざることなく、時代ごとに明確に分けられる。

この独特な都市構成において、公共・個人的な生活はどのように送られているのかが非常に興味深いところである。さまざまな時代の都市計画によって1つの領域にスケールと機能が混合しているが、住宅といったプライベートな空間は公共空間とははっきりと分断されている。立入禁止領域は看板などで示され、気づかずに侵入してしまうことはほとんどない。しかし、公共空間そのものは「プライベートではない」というパラメーターだけに絞り込まれ、曖昧である。公共領域に境界はあまりないので、機能の設置には自由性がある。つまり、どこにでも公共空間を発展させるポテンシャルが隠れており、場所の特徴によって規模の異なるパブリックスペースが生まれる。行政だけではなく、民間企業や住民も場づくりの主体になり、多数多様な街並みが存在する。

大規模なスペースの例としては、新宿駅西口広場と東京駅丸の内駅前広場といった巨大な駅前広場がある。このスペースは都市計画ののちにつくられ、街の顔になることを目指している。ほとんどの場合は、広場とともに街区の変更も計画に含まれており、街全体を変える。これに対して、ポケットパークといった小規模なプロジェクトは街の構造に合わせて設置される。公共空間のなかで人々に愛される横丁と路地は独特であるかもしれない。昔の都市計画から生み出された道が親しまれ、非常に賑やかな雰囲気広がる。新宿ゴールデン街はその1つであり、日本で一番乗降者が多い新宿駅から徒歩8分ほどのところにある不思議な街だ。今も昭和の雰囲気が感じられ、都民だけではなく、観光客からも人気がある。夜に明るく光る門を通ると別世界に入る。10㎡の面積を超えないお店の内部を外から見ることができるので、道と建物の関係が強く、歩行者も風景に惹かれる。中に入ってみると、日本を代表するおもてなしが感じられ、店主と客の間にはコミュニケーションが自然に生じ、隣人の話を聞きながら飲食を楽しめる。

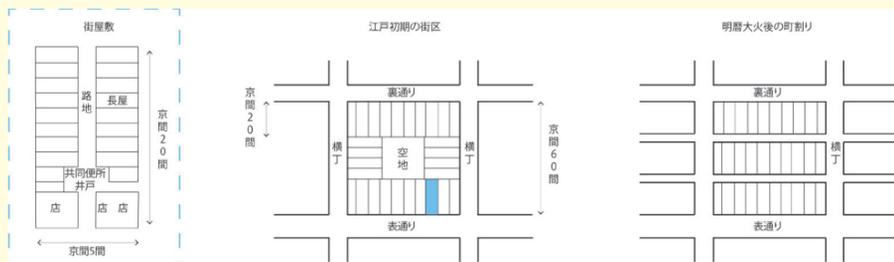
公共空間の調査を通して小規模なスペースの重要さがわかる。巨大な広場が続々と設置される一方で、この空間は公共的な性質がなく、トランジットスペースになる傾向がある。これに対して、人間スケールの規模を守った小さなパブリックスペースでは人々が触れ合

い、人間関係を深める場所になる。この点でも日本のあり方とは大きく異なり、スペインでは公共生活のほとんどが街に点在している広場で送られる。日本とは逆に、広場は大きくなるほどパブリック・スペースとして認識される。都市計画のなかでも、広場が「街の表」として重視され、大通りは街のあらゆる広場をつなぐ道になる。しかし、近年の観光ブームによってこのスペースが街のショーウィンドーになり、住民に嫌われるようになった。日本でも、ヨーロッパでも、住民に好まれるパブリック・スペースのあり方を考え直す必要がある。

日本の街は、さまざまな時代の発想と政策が混ざる場所であることによって、グレイゾーンと曖昧さにあふれている。都市は部分的な計画の集積からできていると言えるだろう。これに対して、スペインの街には昔からの全体的な計画が今も見られる。だからこそ、本質的に大きく異なる街を比較するのは非常に面白い。特に、都市構造によって住民の集まり・暮らし・好みなどがどのように違うのかを調査することは価値がある。

参考文献

- *1 御厨 貴 (2016) 大震災復興過程の政策比較分析: 関東、阪神・淡路、東日本の三大震災の検証 (ミネルヴァ書房)
- *2 <http://japanpropertycentral.com/2014/02/understanding-the-lifespan-of-a-japanese-home-or-apartment/>
- *3 小林一郎 (2014) 「横丁と路地を歩く」 (柏書房)
- *4 藤森照信 (2017) 「近代日本の洋風建築栄華篇」 (筑摩書房)

江戸町割りの展開 出典: <http://www.ginza-machidukuri.jp/column/column1-3.html>

新宿西口広場の夜景



表参道駅の周辺にあるポケットパーク



新宿ゴールデン街の夜景



プエルタ・デル・ソル広場